

如水会寄附講義「社会実践論」講義要綱（2007年度夏学期）

講義責任者：山崎秀記

2007年4月17日（火）オリエンテーション
14時40分 東2号館 2201番教室

如水会寄附講義「社会実践論」では、産業界等、社会の第一線で活躍されている本学の12名の先輩の方々が、週1回ずつ（火曜4限）オムニバス方式による講義をされます。

皆さんに、将来の職業選択を軸に大学でこれから何を如何に学ぶかを考える指針となるように、現在第一線で活躍している諸先輩に、「学生時代に何をしたか」、「社会に出てどういう転機があったか」等自らの体験を交えてお話しいただきます。講師の方々は、自分の歩んでこられた、そしていま歩んでおられるところから、社会を、日本を、あるいは世界を切り取って皆さんにわかりやすく提示し、皆さんが、現代社会とそこでの社会実践のあり方を個別具体的に考える機会を与えてください。

さんは、1回きりの講演をただ聞くだけでなく、先輩の生き方や考え方について触発されたものを質問や感想・意見として返し、ともに考え方を出し合ってください。

なお、本講義は、如水会および一橋大学の学問風土の活性化を目指して故永井正（22学）氏が寄附された基金をもとに運営されている一橋大学後援会「キャプテン・オブ・インダストリーを考える委員会」からの資金提供によって運営されています。

講 義 日 程

第1回 4月24日（火）



テーマ：「一橋の精神と風土」

講 師：大澤俊夫 東京商科大学・昭和27年卒
元NECリース（株）会長

講義内容

一橋大学は、日本経済と共に生まれ、日本経済と共に闘って、今日のわが国屈指の社会科学の総合大学にまで発展してきた。その間、一橋の使命と精神とに理解の薄い文教当局の交渉のために、何度か、学府としての存廃の危機に直面してきたが、よくその干渉を跳ね返して学園を守り、その苦闘の中から、搖るぎない「精神と風土」を築き上げて来た。その「精神と風土」とは何かを語り、併せて一橋の建学の精神を体現する言葉として受け継がれている Captains of Industry の現代における意義について言及したい。

第2回 5月8日（火）



テーマ：「優れた経営・優れた経営者
～私が経営コンサルティングの現場で学んだこと～」

講 師：丸山弘昭 経済学部・昭和43年卒
商学部 昭和45年卒
アタックスグループ 代表パートナー
公認会計士 税理士

講義内容

私は大学卒業にあたり職業選択で悩み、いったん決まった大手銀行への就職を断念して公認会計士の道を選んだ。そして、現在では経営コンサルティングファームの代表者として、多くの優秀な中堅企業・ベンチャー企業の経営者と一緒に仕事をする機会に恵まれている。その中で、彼らから優れた経営のコツを学んでいる。

本講義では私が仕事の現場で学んだ優れた経営、優れた経営者について話をするとともに、私自身がコンサルタントとして、また経営者として何を大切にしているかについても触れたい。

学生諸君にとっても、一代で立派な事業に育て上げたオーナー経営者、あるいは時流に乗って成功したベンチャー経営者の経営手法、人材育成法、成功哲学などは研究対象としておもしろいだけではなく、これから的人生設計をする上で参考になると考える。

第3回 5月15日(火)



テーマ：「進路を決める－継続か転進か？－」
講 師：森田政敏 経済学部・昭和60年卒
株式会社プログレッシブ 代表取締役

講義内容

私は大学を卒業して伊藤忠商事に入社しましたが、36才の時に当時無名のユニクロ（会社名はファーストリティング）に転職しました。ユニクロが急成長するとともに、私自身も若手役員として注目されてTVに出たりもしましたが、2年前（44才）になってその地位を捨て、不動産ファンドの会社を起業しました。私の経歴は、それまでの蓄積や経験を2度捨てるという、出来れば避けたい進路を選んだものです。学生諸君は、3年間という短い期間で将来の進路を決めるという厳しい環境にいると思います。その間に、自分は何をしたいのか？自分の得意分野は何か？を考える必要があります。私が考えたことや経験したことをお話し、参考にしてもらえばと思っています。また、業界の情報についても、お話しします。

第4回 5月22日(火)



テーマ：「日・米・独・仏の職業意識と社会比較論」
講 師：高橋 衛 経済学部・昭和39年卒
ドイツ証券株式会社 常勤監査役

講義内容

何故アメリカのアンパイアは3ボール1ストライクとコールするのか。何故ドイツの高速道路は無料なのか。何故フランスでは消費税が高いのか。等々、8カ国に住み、5カ国で働いた貴重な体験と都市銀行、総合研究所、ホテルと3社3様のサービス産業に従事した経験より編み出された「た・か・は・し・の法則—国際版」を社会人予備校生諸君に向け具体例の比較により対話を試みる。講師の話は独断と偏見なのか？一橋生の常識はどこまでグローバルに通用するのか？国際舞台で活躍し、五大州で雄飛する為の助けになる事を祈念して勝負する。

第5回 5月29日(火)



今井 彰



森 健

テーマ：「少年老い易く、・・・・」
講 師：今井 彰 商学部・昭和43年卒
株式会社デルフィス 取締役社長
森 健 社会学部・昭和48年卒
株式会社電通 執行役員

講義内容

1960年代、1970年代に本学に学び、現在は日本の広告業界に身を置く二人の卒業生が過去・現在を対話形式で語る。学生諸君との対話も交えて。

- (1) 学生時代に何をしたか
 - (2) 職業選択の動機
 - (3) 社会に出てどういう経験・転機があったか
 - (4) 現在の仕事の実態、展望
 - (5) 職業・仕事を通じて学生諸君に強く推めること（最低限、今何を学ばないといけないか）
- 等について話すことで等身大の普通の卒業生像を提示したい。
(二人のビジネス経験は、主として日・欧・米での自動車業界、広告業界である。)

第6回 6月5日(火)



テーマ：「上司、同僚、部下がインド人－2050年の日本とインド」
講 師：安藤 穂 経済学部・平成11年卒
インフォシス テクノロジーズ リミテッド(インドのITコンサルティング会社)
アジア太平洋部門 日本担当マーケティングマネージャー

講義内容

皆さんがまだ中学生であったころ、私達にとっては衝撃的なレポート「Dreaming With BRICs: The Path to 2050」がゴールドマン サックス証券から発表されました。

このレポート中では2039年までにBRICsのGDPの合計が、アメリカ、日本、ドイツ、イギリス、フランス、イタリアのGDP合計を上回り、さらに2050年には、GDPの順位が、中国、アメリカ、インド、日本、ブラジル、ロシア、イギリスの順になると予想しています。ここでいいうBRICsとは、ブラジル・ロシア・インド・中国の4カ国を示します。この4カ国の中で経済成長率が2050年まで5%を維持するのはインドのみ。

そんなインドという国に魅せられ、米系ITコンサルティング会社から劇的な成長を続けるインドIT企業へ東京支店日本人採用第一号として転職した私より日本のIT業界構造、インドIT躍進の秘密をお話しさせていただきます。

自分の出身大学名が全く通用しない世界で仕事をするということ、外国人と働くということ、インド人と働くということ、そして海外に目を向けている内にいつのまにか日本が世界で一番素晴らしいと再認識してしまったことを含めて、フレッシュマンの皆様の五感を刺激する90分とさせていただきます。

第7回 6月12日(火)



テーマ：「～ニュー・インダストリー編～
美容・健康マーケットの実態と、昨今のホテルスパブーム」
講 師：渡邊愛子 商学部・昭和52年卒
(株)フォーキャスト 代表取締役

講義内容

高齢化社会を迎えた今日、"美しく健康に年を重ねて生きる"ことは、すべての人間のテーマのひとつだといえます。まだまだ一橋ではこの分野の仕事をしているかたがたは少ないようです。まだまだ女子学生がすくなかつた77年卒群を抜いた宣伝センスと、独自の街づくり理論などにひかれて株式会社パルコに入社した私が、ストアプランニング、マーケティング、国際部などの業務を担当、まったく畠違い?の美容室や化粧品エステティックなどを担当していくなかでの、キャリア形成や、無限の可能性を秘めながらもまだまだプリミティブともいえるその業界の実態について言及したいと思います。

第8回 6月19日(火)



テーマ：「時代の潮流と職業選択」
講 師：各務茂夫 商学部・昭和57年卒
東京大学教授 産学連携本部 事業化推進部長

講義内容

講師自らの職歴に触れ、現職に至るまでの経緯と留学や転職の動機等について率直に話をしたいと考えています。

四半世紀前の卒業時に、当時は大学生にとって存在すらあまり認知されていなかった経営戦略コンサルタントの仕事をなぜ志したのか。なぜその会社を退職して起業しようと思ったのか。なぜ40歳近くになって会社を辞めて留学しようと思ったのか？家族の理解は得られたのか？なぜコンサルタントから大学の教員になったのか？留学や転職の際に感じた期待や不安についても合わせて言及したいと思っています。

最後に、現在の大学における仕事について触れ、仕事のやりがいや楽しみについてもお話しします。職業を考える上でご参考にして頂けるものがあればと願っています。

第9回 6月26日(火)



テーマ：「新聞・雑誌づくりの現場から」

講 師：市村友一 社会学部・昭和57年卒

朝日新聞出版本部・週刊誌「アエラ」編集長

講義内容

皆さん、マスコミに興味ありますか？ 今、新聞、雑誌、テレビといった既存メディアはインターネット革命とフリーペーパーの急拡大（代表的なのはR25やL25ですね）という大波に洗われています。はたして活字メディアはIT化の進展とコストダウンの流れに適合できるのでしょうか。そんな問題意識のもと、新聞記者22年、雑誌づくり3年余りを経験してきた立場からジャーナリズムの現状と将来展望をお話ししてみたいと思います。学生の皆さんには新聞や雑誌なんぞ、日々まともに目を通してないのかもしれません、マスコミ志望者に限らず、実は情報の宝庫なのです。就活時期になって慌てないよう、活字メディアの私なりの読み方をあわせてご紹介したいと思います。

第10回 7月3日(火)



テーマ：「経営者DNAと事業継承」

講 師：石川裕美 商学部・平成12年卒

石川メリヤス有限会社 企画営業部長

講義内容

愛知県の軍手屋の娘として育てられた私に刷り込まれた経営者DNAは、私の人生におけるあらゆる決断の場面で深く影響してくれる。大学受験、ゼミ選び、就職活動、そして事業継承へ。それぞれの場面において、最終的には実家を継ぐという宿命が決断を左右していた。

講義では、私のこれまでの経験を具体的にお話しし、経営者を親に持つ人間は成長過程においてどんな特殊な体験をするのか、またそれらが後の人生においていかに影響していったのかをお話したい。また、上記に関連させて、同族企業の是非についても議論したい。

さらに、経営者とサラリーマンの仕事に対する考え方の違い、経営者の中でも起業家と継承者の違いについて、私がこれまで感じたことを述べていきたい。

第11回 7月10日(火)



テーマ：「株式公開と公認会計士の役割」

講 師：古川雅一 商学部・昭和48年卒

公認会計士

講義内容

新規株式公開の20数年の流れを振り返ると、証券市場の規制緩和の歴史と日本の産業構造の変化を見る事ができる。規制緩和は新しいビジネスモデルに資金調達の門戸を開放し、中小中堅企業に発展の場を提供することで、日本経済の活性化に少なからぬ貢献をしてきたと考えられる。他方、ここ数年、事業基盤の脆弱な新興企業だけではなく、伝統的大企業にあっても証券不祥事が多発しており、パブリックカンパニーに対する開示制度の立ち遅れや企業管理体制に関する監視制度の整備が充分ではないことが明確になってきた。現在、これらの制度整備とともに、会計制度に関しても透明度や統一性の確保のため、世界的な収斂作業が行われている。このような中、公認会計士が期待されている役割について考えていただきたい。

第12回 7月17日(火)



テーマ：「外資系投資銀行家からみた日本の金融業界再編」

講 師：朱 殷卿 法学部・昭和61年卒

メリルリンチ日本証券株式会社マネージングディレクター
金融法人グループチアマン

講義内容

1990年代以降、日本は戦後からの国家主導の混合経済体制から本格的な市場経済体制に移行する過渡期に入ったが、この中でも、バブル経済崩壊に伴う不良債権の増大、主要行及び主要企業の破綻、業界の再編という形で、著しい逆風と激動の時代を経験したのが金融業界であった。この時期にM&Aアドバイザーとして数々の日本の金融業界の再編に関与した経験から、この10年間の激動期を経て日本の金融業界がどういった点で変化を遂げ、また今もどのような課題を抱えているのかを俯瞰していただきたい。さらに、業界再編の過程で重要な役割を果たす投資銀行とはどのような業界であり、そこで働くプロフェッショナルの論理と倫理とはどのようなものかを、日本経済が直面する課題をふまえて考えていただきたい。